



第十一回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

## 応募総数

小学生の部	152作品
中学生の部	487作品

## 審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

みんながんばっている！

三木卓

今年も、若いみなさんの感覚や思考に、たくさん触れることができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。言葉で心のなかに在るものを、みなさんがつづつたものは、たとえお会いしても知ることのできない、みなさんの思いを知ることができました。

わたしは八十七歳の人間ですから、今の若い人が何を考え、感じているのか、を知りたいといつも思っています。詩の選は、わたしにとって貴重な機会です。

コロナが流行をはじめて幾年になるでしょうか。コロナはまだおさまるとはいえないし、ウクライナでは、はげしい戦争が続いています。日本もその影響からのがれることはできません。

そういうことは、みなさんの作品にじかにあらわれていません。しかし、いろいろな制約のなかを生きている、この決してみじかいとはいえない日々のことを、みなさんの詩を読みつづけていると、どうしても思います。みなさんも、もつとのびのび生きて、あばれてやりたいでしょう。早くそういう日が来てほしい！

小学生の部での大賞は鎌倉女子大学初等部の伊東美月さん「たまごをわったら」に決まりました。伊東さんは昨年も入賞しています。これもすばらしいことです。

卵をわるという行為は、コツをおぼえるまでちよつとタイヘンで、おぼえると気分のいいものです。黄身がでてくるのじゃなくて、いろんな別なものがでてくるなんて、とても愉快。伊東さんは、本が出てきたり、海賊や恐竜がでてきたり、とても自由。きちつと終りかたもできています。

中学生の部は、東京学芸大学附属小金井中学校の鈴木友結さんの「本と共に」が大賞をうけました。本を読む、本の世界にひたるといふことのよろこびとおどろきを、素直な心で書きとめています。こういう気持を清々しい感覚でとらえていて、作者の将来への期待が、とてもこころよかったです。

みんながんばっています。早くのびのび活躍できる時代が来てほしい。そのとき今の生活体験はみなさんにとって必ず役立つものになるでしょう。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「たまごをわったら」

鎌倉女子大学初等部2年 伊東 美月さん  
いとう みづき

りょうりを するのに たまごをわって

おかしが出てきたら どうしよう

おかしを食べたら おもしろいな

たまごをわったら うめぼしが出てきそう

おばあちゃんの家を うめでつくった うめぼしかも

食べたら すっぱくて お顔が赤くなった

お顔が うめぼしみたいな色になった

たまごをわったら 本が出てきた

読んでみたら かいぞくの話だった

さいごに かいぞくたちが力をあわせてきょうりゆうをたおしていた

また たまごをわったら フライパンが出てきた

お母さんが たまごをフライパンで おいしいケーキをつくってくれた

だれかのたん生日になった

つぎに たまごをわったら セキセイインコとハムスターが出てきた

ねずみ色のハムスターは くるりとまわった

インコは水色の羽をカミカミして ねむってしまった

たまごをわったら こんどはエメラルドグリーンの車が出てきた

車にのって かぞくみんなで どうぶつえんに行った

どうぶつえんの 赤ちゃんパンダを見たら

かわいくって ずっと見ていたかった

さいごのたまごをわったら にじが出てきた

にじに おねがいごとをした

まい日 たまごから たのしいことが出てきますように

みんなといっしょに たくさんあそべますように

中学生の部 大賞 「本と共に」

東京学芸大学附属小金井中学校1年 鈴木 友結さん

私はいつも

そこに飛び込む

私はそこで

ただただ見ている

誰にも気づかれないまま

目の前で起こることを

ただただ見ている

そしてたまに

そこにいる人になって

一緒にいろんなことをする

私はそこで

喜びを見て

冒険をして

時に涙

飛び込む先は

日に日に違うけど

いつもそこでいろんなものが

動き出そうと待っている

だから

私はいつもそこに飛び込む



小学生の部 入賞

入賞 「おばあちゃんさようなら」

鎌倉市立腰越小学校1年

浅田<sup>あさだ</sup>

茉椰<sup>まや</sup>さん

くるまでいったよ

おばあちゃんに会いに

おおさかまでいったよ

どきどきしたよ

まっくろのワンピースをきて

おわかれしたよ

あかちゃんのとぎ

くるくるまわるおいすで

あそんでくれた

あんぱんをたべさせてくれた

カレンダーのうらにおえかきしてくれた

おかおがつめたくなった

おばあちゃん

おほねになった

おばあちゃん

おばあちゃんありがとう

おばあちゃんさようなら

入賞 「はながさく」

鎌倉市立西鎌倉小学校1年 久保<sup>くぼ</sup> 琴葉<sup>ことば</sup>さん

あさがおのはながさいた

お水をあげたら

つぼみがでた

また水をあげたら

はながさいた

たいようにも水をあげたら

にじがかかった

とびはねながらはしりぬけたおとうとは

びしょびしょになった

# 入賞 「おるすばん」

精華小学校2年 須藤すどう 稀玲まれいさん

カチコチカチだれもないあさ

ブーンと車の音とガタゴトガタゴト

せんたくきの音がしているよ

カチコチカチちようちよといっしょにおいしい花のみつをすったよ

カチコチカチ

えがすきなねこさんとふねの絵をかいたよ

カチコチカチ

うさぎさんとはるのワンピースをつくったよ

カチコチカチ

ママとパパがかえってきたら本の友だちはいっしゅんできえたよ

つぎのおるすばんたのしみだな

入賞 「夏のかき氷やさん」

青山学院初等部3年 山田 やまだ くらぶやさん

夏の空を見上げたら

ふわふわ ふわふわ かき氷

「いちごシロップはいかが？」

太陽さんがこう言うの

「かわいくっておいしいよ」

「レモンシロップはいかが？」

お月さんがこう言うの

「昼間にひをいっぱいあびた人におすすめよ」

「ヨーグルトシロップはいかが？」

雲さんがこう言うの

「食べすぎの君におすすめだ」

「ブルーハワイはいかが？」

青空さんがこう言うの

「口の中もまっ青にしてみない？」

「全しゅるいがいいな」

夏の空のみんなで声をそろえて

「かしこまりました」

「ジャー」

「シャー」

「チャパ」

「パシヤ」

夏のかき氷のできあがり

夏のかき氷屋さん ありがとう

「いただきます」

入賞 「だれかの息吹」

トキワ松学園小学校5年 鏑木 邦賢さん

森に入ると

やっと枯れ葉のおいがした

雪がとけたんだ

ほろ苦いフキノトウが顔を出し

キツツキのドラミングがなりひびく

オオカメノキはもふもふ新芽

うつむきかげんのカタクリが

元気を出してそりかえる

だれかが近くで息をしている

聞こえも見えもしないけど

だれかがたしかに息をしている

おくれることなくやってきて

だんだん遠くにはなれてく

今しか会えない

小さな息吹

入賞 「川と月」

鎌倉市立稲村ヶ崎小学校5年  
桐畑きりはた 了麻りようまさん

流れ 流れ どうどうどう

川は どうどう流れてた

どうどう 谷から ざざんざざん

どうどう 海へ びびんびびん

月も流れるようにうつっていた

丸いすがたが ゆれに重なり

光の道が現れた

ぼくはうつとり道を見た

願いが月に届くかも

川とともに どうどうどう

願いを流せ ざざんざざん

お月様が笑ったように見えた

よかった、願いがかなうだろう

安心したぼくも笑った

川と月にありがとうと最後に伝えた



入賞 「隣」

京都教育大学附属京都小中学校 6年 石崎 脩也さん  
いしざき しゅうや

今年の夏休み

お母さんが入院した

一週間だけだよって言われたけど  
僕は長いと思った

プールの帰り

家に帰ろうと自転車にまたがった時

お母さんのところまで行ってみたらって  
自転車に言われた気がした

コロナでみんなと遊べなくなった頃  
やっと乗れるようになった自転車

それから

雨でも

かんかん照りでも

自転車はいつも 僕といっしょ

どんなに 雨に打たれても

どんなにどんなに 痛くても

僕といっしょに 道に行く

どんなに 暑くても

汗だくになって 全力疾走

道に行く

怒られた時も しんどい時も

自転車はいつも 僕といっしょ

僕は よしっとハンドルを握りなおし

ぐいっとペダルを踏み込んだ

面会禁止だから

お母さんには会えないけど

病院を見上げた僕の隣には

いつもと同じ 僕の自転車

## 入賞 「心」

香川大学教育学部附属高松小学校6年 吉川きっかわ 陽大さんあきひろ

心は湖

どこまでも深く

どこまでも広がる

波がたつことも氷が張ることもある

青くすみわたった湖

心はえんぴつ

使えば使うほど使いやすくなる

世界にたった一つしかないえんぴつ

心は井戸

相手の気持ちをくむ

だけど使わなかったら

その能力を失っていく

心は秘密箱

誰も知らない色んなことが

いっぱいつまっている

だけどためすぎると、

かかえきれなくなる

心は音叉

他人の心に影響されやすい

時には

自分の思いを

無視してしまうこともある

心は密室

時には口というとびらを開けて

外の空気を入れなければならぬ

そうしないと

いつの間にか

とびらがあかなくなっていて

とてつもない孤独が押し寄せる

心は大切である

心を感じとろう

自分の心も相手の心も

入賞 「きのう」

横浜市立茅ヶ崎台小学校6年  
鈴木<sup>すずき</sup>  
海音<sup>かいと</sup>さん

今日のひとつ前の日は

きのうだって いうけれど

めがさめたら

今日だった

きのうは きんのうへ にげてった

ねえ もうひとつ前の日にいったら

きのうになるの

ちがうんだろ

いくら おいかけたって

きのうは いつも ひとあしあとだ

つかまえられないんだ ぜったいに

入賞 「音」

横浜市立茅ヶ崎台小学校6年 永澤<sup>ながさわ</sup> 嘉人<sup>ひろと</sup>さん

僕には聞こえる月の音

川の音

火の音

木がこすれ合う音も

僕には聞こえる

たくさんのお音が聞こえる

水の音

火おこしの音

心の鼓動も聞こえる

森の中で旅をしている

音が聞こえる

中学生の部  
入賞

## 入賞 「私の弟」

東京学芸大学附属国際中等教育学校1年 上垣<sup>かみがき</sup> ひらりさん

私の弟

小さいお腹には無限なスペース  
なんでも吸い込むブラックホール  
食べてる姿は ミニモンスター  
ハンバーグなら二個ぺろり  
大人一人分ならデザートも  
マツハの速度で食べていく

私の弟

うちの家族のお笑い番長  
心の靄を晴らしてくれる  
スツールの上でノリノリダンス  
BGMと一緒に激しく踊る  
みんなの心がうふふ 自然と踊る  
でも笑ったらまゆが人の字になっちゃった  
お調子者だが繊細だ

私の弟

時々鬼になって荒れ狂う  
実は 恐怖の大魔王  
怒った顔はまさに般若  
疾風の如く狙った獲物は追い駆ける  
でも ピンチの時は菩薩に変わる  
頭を打った時は水を持ってきてくれた



だから私は弟のことが

大好きだ

## 入賞 「ことのは」

藤嶺学園藤沢中学校1年 浜田 竜太郎さん

はまだ

りゅうたろう

言葉は

私の周りを巡っている

誰かをやさしく包みこみ

誰かをひどく痛めつける

そんな異形な物体が

この町で皮肉にもぶかぶか浮いている

言葉は表現

誰かに何かを伝えるため

今日も空をさまよっている

誰にも読まれずに落ちた手紙は

行き場を失いにじんでしまう

それでも

言葉は誰かに何かを伝えている

声というものにのせて

感情を伝えるため

言葉は人をたずねてさまよう

言葉がそうしてくれるから

私は今日も

「いつてきます」が言えるのだ

入賞 「笑い溢れる動物園」

智辯学園和歌山中学校1年 藤原 悠気さん

笑いながら

空に浮かぶ黒い点一つ

するとサイレンが鳴りだす

人は慌てて獣を殺す

ライオンがすぐに死ぬ

肉の中には毒

さようなら笑って暮らした楽しい動物園

カバがすぐに死ぬ

スイカの中には毒

さようなら笑って暮らした楽しい…

シマウマは空腹で死ぬ

何も食べず水も飲まず

さようなら笑って暮らした…

仲間が我慢できず死ぬ

水の中にも毒

さようなら笑って…

ヒトがついに去っていく

涙を流しながらありがとうと言って

さようなら…

人は慌てて獣を殺す

するとサイレンが鳴りだす

空に浮かぶ黒い点一つ

笑いながら

入賞 「あつつ」

智辯学園和歌山中学校1年 吉田 改理さん

家を出て「あつつ」僕が言う

これは「いってきます」

窓の外をみて「あつつ」妹が言う

これは「クーラーつけて」

そうめんをゆでて「あつつ」母が言う

これは「ごはんやで」

風呂からでてきて「あつつ」父が言う

これは「サツパリした」

暑さで言葉が溶けていく

暑さで言葉が乾いていく

今日久しぶりに雨がふった

雨上がり、空に大きな虹

「あつ、きれい」

言葉が帰ってきた

## 入賞 「落書き」

沖縄県立球陽中学校2年 比嘉<sup>ひが</sup>木乃葉<sup>このは</sup>さん

私は今日もシャーペンを握る

文字が並ぶノートのすみには

いねむりをするもう一人の自分がいる

それを見て私はふわあと

小さくあくびをする

私は今日もシャーペンをにぎる

手元のメモ帳の端っこには

ほおが膨らんだもう一人の自分がいる

それを見て私はふうと

小さくため息をつく

このつまらない時間の空白にも

落書きをおみまいしたい

この世界にはあるのだろうか

希望というインクは

白紙のような日々にあきれて

今日も落書きをしている

私が満足するために

今日もシャープペンを手にとらう

入賞 「……………伏線を張ればいい」

駒場東邦中学校2年 吉田 令さん

よしだ

れい

伏線は張られる

小説やマンガに。

その存在はあってもなくても

人々の目を物語に集める。

伏線は張られる

ありえない所に。

まったく想像できないところにあるから

おもしろい

そう

伏線はどんなものにも張られる。

自分たちは何度もぶつかると

苦しいつらい環境に

じゃあそれに自分で伏線を張ればいい

物事を最後まで引っぱれ

そしてつなげ

そうすれば……………

おもしろくなる



# 入賞 「到来」

関東学院六浦中学校3年 高原たかはら 彩音あやねさん

朝の空気に 目が開いて

思わず 身ぶるいをした

いつの間にか 蝉の声は消えた

ろうかに はだしが冷える

ああ、やって来たのか

空の高さに 背が伸びて

思わず 深呼吸をした

コスモスが 風にゆれる

いちようは 日に輝く

ああ、やって来たのか

栗のかおりに お腹が鳴って

思わず 立ち上がった

食卓への期待に 心が弾む

焼き魚が 鼻をくすぐる

ああ やって来たのか

## 入賞 「瞬間」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校3年 土志田 としだ みくりさん

塀の上の動かない 小さな影

それは 何か

夕方 長い影の先

そこに居るのは 何か

誰も気づかない くちばし

うづくまる 何か

夏のはじめ 巣立つ雛たち

まだ 模様も違う

あなたも その一羽か

カラスの鳴き声に

車輪の音に

知らない場所に

じっと 怯える

叫んでいる

遠くから きこえる声

見守る 声

それに 応えるように

あなたは 叫んでいる

叫び 叫び

いつか 叫ぶことをやめたとき

瞬きをして

歩いて 走って

自分の力で 飛んでいく

変わりだす

今 あなたは羽ばたいているか

青空の下

私も 自分の力で

変わりだす

入賞 「なりたいもの」

仙台市立第一中学校3年 福本 弥生さん

あたし

文字になりたいの

だって好きだもの

だから綺麗な言葉に仕立ててね

「ツマベニチョウ」の文字

誰かの名前

詩や短歌にもしてちょうだい

あたし

色になりたいの

だって美しいもの

だから鮮やかに仕上げてね

赤の中の赤になって

ばらを紅色に染め上げたい

南国の海の薄い水色になって

アクアマリンを輝かせたい

深い緑色になって

誰かのおしゃれな服にもなりたい

あたし

音楽になりたいの

だって楽しいもの

喜怒哀楽のどれをとっても

表現は楽しいのよ

歌うのは楽しいのよ

奏でるのは楽しいのよ

きつとあなただっつて

知っているとと思うの

あたしの気持ち分かるでしょ？

「なれるわけがない」と言っつて

笑う人がいたっつて

別にいいと思わない？

入賞 「昨日の僕と今日の僕、そして明日の僕」

慶應義塾普通部3年 本間 丈太郎さん

ほんま

じょうたろう

「あとでやろう。」

というあとでは、なかなかやってこない。

「明日から夏休みの宿題をしよう。」

という明日は、明日の明日になってしまう。

未来との約束は、軽々しく約束してしまう。

でも

昨日の僕は、今日の僕のことを信じていたし

今日の僕は、明日の僕のことを信じている。

昨日の僕も、明日の僕も

僕は僕。

知り合いのお姉さんが白血病で死んだ。

お姉さんが、後で食べようとしたアイスが

冷蔵庫でお姉さんを待っていた。

「あの子の代わりに、このアイスをたべてく

れる?」

お姉さんのお母さんからアイスをもらった。

今日出来ることは、今日やろう。

昨日の自分も、明日の自分も

全力で大事にしよう。

昨日の自分の思いを

明日の自分に繋ぐために

今を生きよう。